

『不信仰な者たちと忠実な者たち』

'20/11/29

聖書箇所: マルコの福音書 6 章 1-13 節 (新約 p.75)

先週、私たちは、マルコ伝 5 章最後のみことばから、会堂管理者であったヤイロの娘が1度死んだはずなのに、イエス様が、その娘を生き返らせられたというみことばを見ました。皆さん、覚えてくださっていますよね? …その時、イエス様は、何とおっしゃいました? …ルカ 8:50 に、**こう記されてあります、『恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。』**って…。皆さん、聞いてくださいました? …何と、イエス様は、会堂管理者であったヤイロに対して、「あなたが信じるかどうかで、あなたの娘が生き返るかどうかが変わってきます…」という趣旨のことを話された'のではないのでしょうか?

命題: イエスに対して不信仰な者たちと忠実な者たちとの違いとは?

実は、今日、私たちが学ぼうとしているマルコ 6 章前半のみことばにも、それと同じようなことが記されてあります。そこをご覧くださいますと、当時、イエス様に対して、懐疑的…、つまり、イエス様のことを信じていなかった者たちと、そのイエス様を信じ、従っていた弟子たちとの対比を見て取ることができます。

実は、今日私たちが見ていこうとしている、2つの出来事は、恐らく、実際に起こった順番通りに、マルコが書き記してくれたものでありますが…、しかし、どういうわけか、4福音書の中で、これら2つの出来事を順番通りに(続けて)書き記してくれているのは、このマルコ伝だけであります。恐らく、マルコは、聖霊なる神様の導きの内、これら2つを対比させるため…、意図的に、今日のみことばを書き記してくれたものであると、私は考えています。ですから、今日のメッセージもまた、そのような2つの出来事を対比させるような感じのアウトラインになっています。

その対比と言いますのは、今から約2千年前、イエス様に対して、不信仰な考えを抱いていた者たちと、そのイエス様を信じ仕えていた弟子たちとの対比であります。そういったことを見ていくことによって、願わくは、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、自分の立場(立ち位置?)をより明確に意識して下さること…、そうして、できましたら、イエス様を信じて、せつかく、天の神様が皆さんに与えようとしてくださっている祝福を自分のものとして下さり、そのイエス様から託された使命をより忠実に全うしていただくことを願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、マルコ 6:1 以降をお開きくださいますでしょうか?

I・イエスに対して、不信仰な者たちの特徴 ! (1-6 節)

どうぞ、まずは、今日与えられたみことばの内、1-6 節までを見ていきましょう。このみことばが記されていることは、**当時、イエス様に対して、不信仰な者たちの“特徴”について、であります。**彼らは、どういったような特徴を持っていて…、どのように、この後で学んでいく…、弟子たちと違っていたのでしょうか? マルコ 6:1-6 には、こう記されてあります。

- 1 イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。
- 2 安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行われるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。」
- 3 この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。

¹ 原語では接続詞「καί」があるだけ。この接続詞をどう解釈するかで、意味合いがかなり違ってくる…。聖書の翻訳を比較すると、口語訳以外は、『そうすれば…』と翻訳している。

- 4 イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」
- 5 それで、そこでは何一つ力あるわざを行うことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。
- 6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。

● 真理 ではない知識に頼ってしまっている!

まず、このみことばで見ていきたい、不信仰な者たちの特徴と言いますのは、彼らが、**確固とした、神の“真理”ではない知識に頼ってしまっている!**という点であります。「真理」と言いますのは、簡単に言いますと、「いつどんなときにも変わることのない、正しい物事の筋道。真実の道理。…」であります。私たちは、そういったような…、いつどんな時でも変わることがない真理にこそ、しっかりと目を向けていくべきなのではないのでしょうか?

どうぞ、今読んだみことばをご覧ください。そこには、イエス様が、この時、**『郷里へ行かれた』**とあります。ここで言う『郷里』とは、ガリラヤのナザレであります。確かに、イエス様がお生まれになったのは、エルサレムから近い、あの「ベツレヘム」という町でしたけれども、それは、イエス様の生涯からすると、ほんの一次的なもの(⇒恐らくは、ほんの1年ほど?)であって…、イエス様の母となったマリヤやその夫ヨセフなどは、もともと、ガリラヤのナザレという町に住んでいたわけで…、イエス様は、そのナザレで 30 歳の頃まで過ごされて…、この時、イエス様の家族は皆、ナザレに住んでいたわけなのです。

皆さん、覚えてくださっています? …マルコ 3 章で、イエス様のところへ、イエス様の母マリヤと、イエス様の兄弟たちがやって来たということが記されてありましたでしょ? …ひょっとしたら、あの時、イエス様は、マリヤたちと何か約束(後で、ナザレの家に行くとか?)をされていたのかも知れません。

さて、そのナザレでのこと…。イエス様は、その会堂で、みことばの解き明かしをされておられたようです。しかし、その解き明かしを聞いた、ナザレの者たちは驚かされます。…と言いますのは、彼らは知っていたからです、イエス様が、誰か当時の有名な教師たちから、特別な教育や訓練を受けていないということ…。

例えば、あのパウロなどは、有名な律法学者であり…また、サンヘドリンの議員でもあったガマリエルという人物から律法について厳格な教育を受けたということが、使徒 22 章に記されてあります。いえ、パウロでなくても、私たち人間は皆、誰かから教育を受けないと、たくさんの知識を得ることができません。そうですよね! …だから、ナザレの者たちは、イエス様が、そういったような特別な教育を受けていないことで、不思議に思ったのです。いいえ、不思議に思っただけではありません!

どうぞ、**3 節をご覧ください。彼らは、イエス様の“出生”についても疑問を抱いていたのです。そこには、こうあります、『この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。』**って…。この当時、ほとんどの者たちは皆、世襲制でありました。つまり、子どもたちは、基本的に親の職業を継いでいったのです。イエス様の父親と言うか…、イエス様は、マリヤが聖霊によって身ごもったので、厳密には父親がおりません。しかし、マリヤの夫であったヨセフは大工をしておりましたので、イエス様は、公の生涯に入る、恐らく、30 歳まで大工をしていたはずなんです。だから、彼らは言うのです、**『この人は大工ではありませんか』**って…。また、それだけでなく、ナザレの者たちは、イエス様の母マリヤも、あるいは、その子どもたちも皆、何ら特別な存在ではなく、ごく普通の者だと言うのです! だから、**3 節の最後に、こうあります、『こうして彼らはイエスにつまずいた…』**って…。

⇒実は、ここで、『つまずいた』と訳されてある言葉(σκανδαλιζω)は、「罫をしかける、罪に落とす、信仰が挫折する、不快で信じられなくなる…」というようなイメージの言葉の受動態が、ここで使われています。ナザレの者たちは皆、イエス様のことを、特別な者として…、つまりは、救い主として信じ、受け入れることができなかったのです。

●その不信仰のため、神の恵みに預かることができない！

どうぞ、今度は、今日のみことばの 4 節以降に注目してみてください。ここで、イエス様は、『預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。』と言って、ナザレの者たちの『不信仰に驚かれた…』ということが記されています。

一体、何が彼らの問題であったのでしょうか？⇒それは、ナザレの者たちが、不信仰であったからです。『不信仰』と言っても、その種類は様々です。彼らの問題は、自分たちの持っていた知識や常識を、神様よりも優先してしまった点にあります。…どうぞ、皆さん、もしできましたら、信仰について教えられてある、ヘブル書 11 章を開けてみてください？

本当は、この部分を詳しくみていきたいのですが、時間の関係もあって、2カ所だけ参照します。まずは、11-12 節をご覧ください。そこには、あの信仰の父アブラハムとその妻サラのことが挙げられています。『11 信仰によって、サラも、すでにその年を過ぎた身であるのに、子を宿す力を与えられました。彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。12 そこで、ひとりの、しかも死んでも同様のアブラハムから、天の星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれたのです。』

⇒ここで教えられてるように、アブラハムとサラに約束の子イサクが与えられたのは、かなりの歳になってから…、実に、アブラハムが 100 歳、サラが 90 歳の時でした。これは、彼らの知識や常識では絶対にあり得ないことでした。…しかし、彼らは、神様の約束を信じたのです。そうでしょ？…それが信仰です。

どうぞ、今度は、ヘブル 11:17-19 をご覧ください。『17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。』

⇒ここでも、アブラハムの信仰を見ることができます。創世記 22 章に記されてるように、この時、神は、アブラハムを試練に合わせ、その信仰を試されました。この時、神は、アブラハムに対して、「約束の子イサクを、全焼のいけにえとして捧げなさい！」ということをお命じになられます。でも、そんなことをしたら、イサクは死んでしまいます。しかし、アブラハムは、ここにあるように、「イサクから出る者が、自分の子孫となる！」という神様からの約束を信じて…、「真の神様なら、例え、私がイサクを殺しても、主がよみがえらせてくださる！」と考えて、イサクを捧げようします。これが信仰です！

このように、聖書が教える本物の信仰とは、私たちの持つ理解や常識以上のものです。…しかし、今日のみことばに記されてあるナザレの者たちは、どうであったでしょう？…彼らは、イエス様が、「特別な律法の教育を受けていないから、まともなことを教えられはるがけない！イエス様のことは、小さい頃から知っている…」そう考えて、イエス様の教えてくださる、その内容やそのしるしを見ようとはしなかったのです。

でも、それこそが彼らの“信仰”でありました…。つまり、彼らの神様は、全知でもなければ、全能でもない…。彼らの常識を超えるような、御方ではなかったのです。…でも、それって、この聖書のみことばが教えてくれている神様でしょうか？果たして、ナザレの者たちは、この聖書が教えてくれている、真の神様を信じていたと言い得るでしょうか？…いいえ、彼らは、全く別のお方を信じていたのです…。そういった不信仰のため、当時のナザレの者たちは、神様が与えてくださる“恵み”に預かれなかったのです。

II・イエスに対して、忠実な弟子たちの特徴！（7-13 節）

さて、今度は、その逆…、イエス様に対して忠実であった“弟子”たちの特徴について見ていきましょう。どうぞ、今度は、今日のみことばの内、7-13 節の部分をご覧ください。そこには、こう記されています。

- 7 また、十二弟子を呼び、ふたりずつ遣わし始め、彼らに汚れた霊を追い出す権威をお与えになった。
- 8 また、彼らにこう命じられた。「旅のためには、杖一本のほかは、何も持って行ってはいけません。パンも、袋も、胴巻に金も持って行ってはいけません。」
- 9 くつは、はきなさい。しかし二枚の下着を着てはいけません。」
- 10 また、彼らに言われた。「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまっていなさい。」
- 11 もし、あなたがたを受け入れない場所、また、あなたがたに聞こうとしない人々なら、そこから出て行くときに、その人々に対する証言として、足の裏のちりを払い落とさない。」
- 12 こうして十二人が出て行き、悔い改めを説き広め、
- 13 悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。

●神の召しに預かっている！

さて…、先程も言いましたように、ここ 7 節から全く別のエピソードについて話されているように見えますが、恐らく、このみことばは、先程見た 1-6 節の部分のみことばと対比されています。ここ 7 節をご覧くださいますと、この時、イエス様は、「十二弟子たちを呼んで、二人ずつ遣わし始められた…」ということが教えられています。言わば、この 12 人たちは、イエス様によって“召し出された”のです。

皆さんも、よくご存じのように、イエス様の 12 人の弟子たちは、彼らが自ら志望して、勝ち得たような…、何か“特権”のようなものではありませんでした。彼らは皆、イエス様の方からの、一方的な召し…、つまりは、神の選びによって、弟子とされていったのです。

例えば、つい最近、私たちが学んだ、あのレギオンという悪霊を追い出してもらった人物…、彼は、マルコ 5:18-20 に記されてるように、「イエス様のお供をしたい！」と願い出ました。しかし、イエス様は、彼が付いてくることをお許しにはなられませんでした。そのように、イエス様は、明確な考え…、最善なる御計画をお持ちであり…、その御計画に沿って、ある者たちを選び、ある者たちは選ばれませんでした。

そのような…、イエス様からの召しというものがあったから、彼らは皆、イエス様の弟子となることができました…。そのことと同じように、私たち現代のクリスチャンたちもまた、神様からの一方的な召し…、つまりは、神様の選びによって、その神様の導きのもと、救われることができたのだ！ということをお教えしています。

どうぞ、皆さん。今度は、エペソ 1:3-7 をご覧ください。『3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。4 すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。5 神は、みむねとみこころのままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。6 それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。7 この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。』

⇒ここでは、救いを初めとする、様々な恵みについて教えられています…。何と、天の神様は、この地球が造られるよりも前に、救われるはずの、クリスチャンたちのことをみこころの内に選んでおられた！と言うのです。そして、このみことばは、その選び…、つまりは救いが、神様からの大いなる、『恵み』であると教えてくれています。このように、天の神様は、私たち人類の中の誰が救われて…、誰がクリスチャン

になって、天に行くことができるのか？ということを知り、すべてみこころの内に決めておられるのです。

時々、こういったみことばから、神様が、すべてのことを予め、みこころの内に決めておられるのなら…、救われるのも救われないのも、すべて、神様が決めておられるわけで、それは不公平ではないか？というように言われることがあります。しかし、それは議論のすり替えで…、神様がすべてのことを御存じだからと言って、私たちが造り主なる真の神様のことを無視して、自分の好き勝手に生きていい！ということにはなりません。私たちすべての人間には、自由な選択とそれに対する責任があるのです。

しかし、私たちの父なる神様は、そのように、造り主であられる神様のことを拒んで、好き勝手に生きていた私たちに真理を教えて…、自分たちの犯した罪を清算することができなかった私たちに、罪の贖いを与えるために、救い主イエス様を、この地上へと遣わして、あの十字架上で殺すことで、罪の清算をなしてくださいました…。だから、このみことばは、それが神様からの大きな『恵み』である！ということを知らせてくれているのです。

このように、聖書のみことばは、真の神様が冷たくて…、無慈悲な御方である！という風には、決して教えてはけません。それどころか、真の神様は愛と恵みに富んだ…、偉大な御方である！ということを知らせてくれています。その神様が、永遠の滅びに至って当然の、私たちのことを救うために、イエス様を遣わして下さっただけじゃない！そのことを、世界中に伝えていくための「器」として、まずは、彼ら12人の弟子たちを選び…、そして、彼らのことを訓練して下さったのです。

●神から 権威 を与えられている！

どうぞ、もう1度、今日のみことばに戻ってみたいと思います…、その7節後半以降に注目してください。このみことばを見ますと、イエス様は、12弟子たちを呼び集めて、彼らに悪霊を追い出す力と言うか、“権威”をお与えになった！と記されています。その故に、彼らは皆、イエス様と同じように、悪霊たちを追い出し…、また、病気を直すこともできたようです。そのことは、今日のみことばの最後、13節でも書かれています…、それだけではなく、14節以降を見ても、イエス様とその弟子たちが世間を与えた、その大きな影響の故に、時の国主であったヘロデ王が、自分が殺してしまったはずの、バプテスマのヨハネがよみがえったとか、あるいは、旧約の偉大な預言者であったエリヤがよみがえったとかいう噂に惑わされたということで、如何に、この当時のイエス様と弟子たちの活躍というものが大きかったのか？ということを知ることが出来ます。

こういった奇蹟について、先週に言いましたように…、この時に、イエス様が弟子たちに、特別なしるしや癒しを行なうことができる力と権威をお与えになられた理由は、彼らの語るメッセージが正しく…、真の神様からのものであるという証しのためでありました。つまり、あくまでも、癒しや奇蹟と言いますものは、彼らの語るメッセージが真の神様からのものである！ということを知証明するため…、サポートするためのものであって、決して、病を癒したり、不思議なことをしたりすること自体が目的ではありません。

ですから、どうぞ、今度は、ルカ 24:44-48 をご覧ください。『44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしはまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」 45 そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、 46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、 47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始めてあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。 48 あなたがたは、これらのことの証人です。』

⇒このみことばは、復活された後のイエス様が、弟子たちを離れて、もうすぐ天へ帰ろうとされていた時、聖書の中心的なメッセージというものを理解できていなかった弟子たちに対して、一体、何が聖書の中心的なメッセージなのかということを知らせて下さった時のものであります。しかし、ここにも、癒しについては、一切語られておりません。

また、このことは、皆さんもよくご承知のことですが…、パウロは、当時のコリント教会に対して、最も大切なこととして、どんなことを伝えたと、書かれてあるでしょうか？ I コリント 15:3-5 では、こう書かれています。『3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたいのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、 4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、 5 また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。』⇒ここにも、病気からの快復や癒しに関するようなことは、一切触れられておりません。

もしも、癒しなどが、神様からの大切な…、決して、欠かすことのできない教えであるのなら、どうして、こういったみことばで、癒しのことが語られていないのでしょうか？ ⇒そのことの、納得いく答えは、癒しというようなものが、神様からの中心的な教えなのではなく…、あくまでも、付け足しと言うか…、イエス様や弟子たちの語ってくれたメッセージこそが本物であり…、真の神様からのものであるという証明であったからではないでしょうか？

でも今、一部のキリスト教会では、「こういったような癒しや健康、あるいは、様々な成功や繁栄といったようなものが聖書の中心的なメッセージである！だから、皆さん、癒されたかったら…、健康になりたかったら…、あるいは、この世で成功したかったら、どうぞ、この教会に来てください。神は、そのような祝福を…、繁栄を与えて下さいます！」…そんな風に、自分たちの教会のことを触れ込む…、そんな教会が今、増えてきているというのです。でも、そういったようなことは、この聖書が1番に伝えたいメッセージではありません。

まあ、確かに、イエス様はこの時、弟子たちに、素晴らしい力と権威をお与え下さいました。その故に、12弟子たちは皆、悪霊たちを追い出したり…、病気を直したりすることができたのです。それと、実は、この時、この12人の中には、本当は救われていなかったはずのイスカリオテも居て、他の11人たちと同じように、悪霊を追い出したり、奇蹟を行なうことができたのです。…ということは、つまり、イエス様がマタイ伝 7章でもおっしゃっておられるように、悪霊を追い出したり、奇蹟を行なえたというのは、決して、救われた者の証拠ではないということです。…ということと、現代、私たちクリスチャンには、このような癒しであったり、奇蹟を行なう権威は与えられておりません。しかし、私たちに、使徒たちが生きていた頃には、ほとんど完成していなかったような、聖書のみことばが完成しています。私たちは今、この聖書の権威によって、神のことばを取り次いでいくのです！

●神から 使命 を与えられている！

どうぞ、今日のみことばの、8節以降をご覧ください。この部分から、私たちが最後に確認していきたいことは、イエス様が、12人の弟子たちに与えられた、“使命”とも言うべきものであります。イエス様は、①弟子たちのことを、特別な恵みのもとに選ばれて…、②そして、その弟子たちに、特別な権威をお与え下さって…、③その上で、特別な“使命”のために遣わして下さいました。

この時、イエス様は、12人の弟子たちを派遣されるに当たって、幾つかのアドバイスをなされました…。そのアドバイスとは、①まず、旅のためには、何も持って行かないようにしなさい！つまり、最低限の荷物で出掛けていきなさい！ということと…、②これという家を決めたら、そこに留まって、しっかりと伝道をしなさい！というようなものであります。

この12節をご覧くださいますと、彼らが宣べ伝えていた内容が、『悔い改めを説き広め…』とあります。実は、ここと非常によく似たことが、ルカ伝 10章でも教えられています。イエス様は、弟子たちを遣わすに当たって…、その弟子たちのことを受け入れてくれる者が居るのなら、そこに留まって、しっかりと宣教をすべきことを教えてくれています。しかし…、その逆に、もしも、その家の者に受け入れてもらえないのなら、その責任は、弟子たちの側にあるのではなく…、その家の者にある！というのです。

ここで、イエス様が、弟子たちに、『旅のためには、杖一本のほかは、何も持って行ってはいけません…』とおっしゃられたように、私たちは伝道していくに当たって、軽い旅行気分で行くのではなく…、自分たちの生活、自分たちの暮らしぶりやその生き方を通して、神様からのメッセージを語っていくべきであります。だから、イエス様は、**マタイ 5:16** で、**こう教えられましたでしょ？『このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。』**って…。

この当時、ユダヤ人たちは、異邦人たちの地を通った時、その土地のちりをきれいに払い落としてから、その場所を出ていったのだそうです。つまり、ここで言われていることは、「もう自分たちがなすべき責任は果たし終えた。後は、彼ら自身の責任であり…、彼らの選択である…」ということを意味しています。…と言うことは、つまり、この弟子を受け入れることは、神を受け入れることであり…、神が遣わされた者を拒むことは、神を拒むことでもあるのです。だって、この弟子たちは、他でもないイエス様によって選ばれた者たちであり…、彼らは、イエス様の権威をもって、そのメッセージを語っていったわけなので…。

<励ましの言葉>

さて、現代におきましては、12弟子…、あるいは、12使徒に代わるような者は存在しません。…というのは、使徒という存在は、**使徒 1:22** によりますと、『**イエスの復活の証人**』でなければならないからです。しかし、私たちクリスチャンが、神様から語るべきメッセージを託された者たちである！そのような務めを与えられた！という点においては、今日のみことばに出てくる者たちと、そう大きな違いはありません。

私たちがなすべきことは、私たちの生き方を通して、イエス様の語られたメッセージを、それぞれ、言葉と行ないによって、伝えていくことでもあります。私たちの語るメッセージを聞いた者たちが、どういう判断を下すか？信じるか否か？は、私たちの責任の範疇ではありません。その責任は、聞いた者たち自身にあるからです。

しかし、神は、現代において、神からのメッセージを語るメッセンジャーとして…、また、救われた者の見本として、クリスチャンである皆さんを選ばれたのです！神は、皆さんに、たくさんの恵みを与えて…、永遠の罪の裁きから救い出してくださただけでなく…、いつも皆さんと共に居てくださって…、皆さんのことだけでなく、その周りの環境すべてをご支配してくださっています。その神様が今、皆さんを、用いようとしてくださっているのです。

実に、そのために…、私たちは生かされているわけです。私たちは、決して、この地上で、多くの財産を築いたり…、自分たちの名前を売ったり…、あるいは、私たちの趣味を突き詰めるために、生かされているわけではありません！神が、皆さんにいのちを与え…、皆さんの健康や生きていくために必要なものを与え続けてくださっているわけは、私たちの語る福音のメッセージこそが、聞く人たちの永遠を変え…、その人たちに生きる喜びと希望をもたらすからです！私たち人間が、真の神様の前に、本当の価値ある人生を送っていくために、決して、欠かすことのできない理解を…、本当の悔い改めを、福音のメッセージは与えてくれます。どうぞ、そのことを忘れないで、皆さんの残りの人生を…、1日1日を歩んでいっていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。